

第二六回

ジェトロ・ビジネスライブラリーとは異なる価値

二宮 康史

アジ研図書館について話す前に、最初に筆者の経歴を説明したい。筆者は元々ジェトロ本部で採用され長年ブラジルを中心としたラテンアメリカ地域の調査業務に従事してきた。現在はアジ研地域研究センターに在籍しているが、これは研究業務を経験したいという希望があつて異動したものである。外部の方から本部の「調査」とアジ研の「研究」は何が違うのかと聞かれることがある。実はこの問いは、東京・赤坂のジェトロ本部ビジネスライブラリーと、千葉・海浜幕張のジェトロ・アジ研図書館の違いを理解するうえで共通していると考ええる。そもそも外からみると、調査と研究はどう違うのかわかりにくい。ここでは両方を経験した私なりの解釈をもとにアジ研図書館の価値を述べたい。

本部の調査は、貿易投資促進という使命のもと、その担い手でもある日本企業のニーズを意識した業務を行っている。日々企業からの問い合わせがあり、その中身はビジネス対象国の経済・政治動向といったマクロの話だけでなく、個別産業の市場動向や輸入制度、投資規制、さらには税務・法務に関するミクロの話まで多岐に渡る。企業が調査部に問い合わせる目的は、対象国でのビジネスを前進させるために必要な最新の情報を得たいというものが多い。本部の調査部ではそのニーズに応えるため日々情報収集し、ビジネスライブラリーでもそのニーズを踏まえた資料の収集、公開を行っている。一方、

アジ研では同じジェトロという組織内に位置付けられているが、必ずしも全てが企業への情報提供を主目的とした研究を行っているわけではない。アジ研は設立理念として途上国研究を通じた「世界への知的貢献」をうたっている。つまり日本企業や政府といった枠組みにとらわれず、世界的な視野で途上国研究に取り組む機関といえる。そのため、アジ研図書館も自ずと同じ方向性で資料収集、公開を行っている。ここには日本企業がビジネスで直ぐに必要な情報、例えば企業ダイレクトリーや市場調査報告書といった実務的な資料が備わっているわけではない。所蔵は主に途上国研究に資する経済、政治、社会等を中心とする諸分野の学術的文獻、歴史的な基礎資料が占めている。

ではアジ研図書館は日本企業のビジネスには役に立たないのであるか。この問いに筆者なりの答えを述べるにあたり、なぜ筆者が調査研究両方の経験を希望したかについて説明したい。これまで筆者は本部あるいは国内、海外事務所に在籍した期間、多くの調査レポートや情勢分析記事を執筆してきた。それらは、今その国の経済やビジネスの状況がどうなっているか、つまり現状を説明することを主な目的に執筆されている。しかし長年記事を執筆するなかで、ひとつの問題意識が浮かび上がるようになった。それは、なぜ今の状況が生まれているのか、その成り立ちや発生メカニズムに対する関心で

ある。それというのも、現状を説明するための情報は時間の経過とともに古くなり常に更新の必要性が生じる。しかしその背後にあるメカニズムについては時間が経過しても大きくは変わらない。例えば、数年前のGDP成長率の数字で今年を説明するのは困難であるが、経済成長のメカニズムに関する説明はある程度普遍的であるということだ。アジ研では途上国を対象に、まさにそのメカニズム解明に向けた学術的研究が行われていると認識している。

つまりアジ研図書館の価値も、同様の目的に沿った文獻、資料がまとまった形で一般の来館者向けに公表されているということになるだろう。それらは経済学、政治学、社会学などの学術的なアプローチを特徴としているため、一般ビジネス来館者には馴染みにくいかもしれない。しかし図書館に常駐している地域などの専門性を持ったライブラリアンが来館者の目的に応じた様々なアドバイスをを行っているほか、二〇一四年のブラジルのサッカー・ワールドカップのような時事的テーマも扱った企画展などもあり、来館者の利便性向上に向けた工夫が随所にみられる。日本企業が事業拡大に取り組む途上国の状況はめまぐるしく変化する。その変化の深層にあるメカニズムに関心を持つことは、目の前のビジネスに対応するには一見遠回りのようにみえて、実は本質的な意味で有意義なのではないか。アジ研図書館の価値もそこにあると筆者は考えている。

(にのみや やすし／アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)